

第7回市史講座ミニレポート：平成29年11月25日（土）

「松江市域の集落名称-本郷と口-」

講師：喜多村正先生（島根大学名誉教授）



今回の講座は、『松江市史』別編2「民俗」を担当された喜多村正先生（民俗部会長）より、「松江市域の集落名称-本郷と口-」というテーマでお話いただきました。

喜多村先生は、藩政時代に形成された出雲地域特有の田租収納を目的とした村の土地区割りである「輪」の地名を記入した「輪切り帳」と、「村絵図」に記載された村内の地名をくまなく調査され、そこから導かれた出雲特有の土地の名称について話されました。出雲地方に非常に多いのは、「本郷」と「口」のつく地名とのこと。これは、出雲の地名の特徴だそうです。

本郷と口のお話の前に用語の説明があり、民俗学においては、藩政期に行政区画として成立したのが「村」であり、「ムラ」は（村落）であって、人間が生活共同体として自然に集合した自治単位である地域をいうとのこと。さらに、その下部組織には「組」「班」があり、これら戸々の家の集合形態を、地理学用語で「集落」と呼ぶとのことでした。

さらに、松江藩での特徴は、複数の「ムラ」の集合体が「村」、つまり藩政村として成立していることです。ちなみに、隣の鳥取藩では「ムラ」が「藩政村」そのもので、「ムラ」の集合体ではないというから不思議です。

この藩政村は、明治 22 年以降の町村合併において集合し、かつての藩政村は「区」＝「大字」^{おおあざ}になって近代へと続いていきます。また、かつての「村」である「大字」の下部に、「ムラ」を基盤にした自治組織が「組」^{こあざ}「小字」「班」などとして現在も続いているのですが、近年ではそれらも統合され、地名としては消滅しつつあります。

そのかつての地名を再現するため、喜多村先生が「輪切帳」「村絵図」などを調べ、出雲地方 10 郡の「本郷」地名を書き上げられたのが【資料 2】です。出雲国内 121 ヶ村に「本郷」の地名があることが明らかになりました。

では、「本郷」とはどのような意味を持つ地名なのでしょう。中世においては、「本郷」とは守護地頭が本拠地とした場所をさす地名で、島根県では石見地方に中世起原とした「本郷」が多いそうです。しかし、出雲地方で 121 ヶ村にある「本郷」は、中世に起原を持つのではなく、近世になってから藩政村の中で、「村の中心地」という意味合いで「本郷」と呼ぶようになった地名なのだそうです。ですから、今も「本郷」と呼ぶ出雲地方の地名の場所は、かつての村落—今の大字—の中心地であったはずです。

ついで、「口」のつく地名には二つの意味があり、一は「村」の出入り口当たる場所を「～口」といいますが、二に、村絵図で見ても村の出入り口ではない場所に「口」「上口」「下口」などの地名がある地域があります。これらの「口」は、「組」の意味で使われる地名、すなわち「口」＝「村組」をいうのです。現在も、上組＝上口、下組＝下口と呼ぶ地名が各地に存在しています。この「～口」とつく地名が多いのも出雲地方の特徴とのことでした。

以上のように、今日次第に消えようとしている地名を浮かび上がらせ、かつての村落の活気を地名から彷彿とさせていただいたご講演でした。